

編集後記

本誌への原著の投稿数が著しく減少している。30巻8号(平成9年8月号)の編集後記に、私はこの傾向を危惧する拙文を著したが、それは一時的な現象ではなくその後も一段と加速している。原著論文の投稿数を経年的にみると、一昨年までは年間130篇前後あったが、昨年は82篇、今年は10月までに78篇と落ち込んでいる。掲載された原著論文数が症例報告や研究速報などを併せた全論文数の中に占める比率は、一昨年までは35%前後であったが、昨年は30%まで減少し今年30%を割ってしまった。日本外科学会雑誌が一般投稿制を廃した際に、学位論文も含めた原著論文の投稿先が本誌へまわることを私たちは予想したが、そのような現象は全く認められなかった。

前編集後記では、この憂うべき状況の根底には英文論文偏重による“邦文誌の空洞化”があるのではないかと考察した。本誌編集委員会でもこの状況の原因がどこにあるのかを真摯に検討した結果、同様の結論に達した。すなわち、自信が持てるあるレベル以上のデータが得られた研究者は、苦勞してでもこれを欧文論文に仕上げ、欧米の一流誌にチャレンジする。一方それに該当しないような研究は、本誌ほどハードルが高くない他誌へ投稿する(本誌は査読が厳しいという風評があるそうだ)、という二極化が進んでしまった。若手研究者の学位論文にも同様の傾向がみられる。

このような状況の中で、本学会評議員選出の業績評価法が一部修正され、本誌掲載論文の評価点が加点された。これが追い風になって欲しいものだが、本誌編集委員会としても査読に遅滞が生じないよう、とくに学位論文の査読にはそれをより心掛けるよう一同確認し合った。30巻1号(平成9年1月号)の‘会誌編集委員会より’(大原前編集委員長)の‘この雑誌が目指すところ’の最後の段落をここで再度繰り返したい。『本雑誌は、日本語で書かれた雑誌のうち最高級の雑誌にしたいと考えている。日本語で博士論文を書く必要がある人もいるだろうし、日本語で発表したい人も日本にはたくさんいるはずである。その人達のためにも日本語の雑誌の最高のところを現在は目指すことにしている。』

(安藤暢敏)